

角刈りの人質

田
淵
靖
章

人物

大野弘二	(28)引きこもり
吉沢誠二	(28)大野の友人
バス男	(23)バスの乗客
バス女	(21)バス男の恋人
地味な男	(51)バスの乗客
ドクター	(50)バスの乗
近藤康郎	(24)誘拐の主犯格
太った男	(24)康郎の仲間
大柄な男	(23)康郎の仲間
小柄な男	(23)康郎の仲間
武藤秀樹	(24)康郎の友人
塚本先輩	(27)康郎の先輩
理容師	(58)散髪屋さん

○大野の部屋

髪が胸まで伸びている大野弘二(28)、
ジャージのズボンを腹まで上げる。

帽子をかぶる。

机の上にある自転車のカギを取り、
部屋から出て行く。

○鉄道沿いの細い道

大野、垂直の姿勢で自転車に乗って、
駆け抜けて行く。

3

○散髪屋の前

大野、自転車に乗ってやって来る。
自転車を止めて、散髪屋の元に向
かう。

○散髪屋の店内

大野、扉を開けて入って来る。
扉についている鈴の音が響く。

理容師の声「いらっしやいやせーい！」

大野、帽子を取った状態で、散髪台に座る。その姿が鏡に映っている。

理容師（G）、「その横に現れる。」

理容師「兄ちゃん坊主でええか？」

大野、驚いて理容師を見上げる。

大野「いやっ……あっ……もうちよつと……

長い感じに……しっ……たいかなって……」

理容師、大野を見たまま、驚いた様に呆然とする。

理容師「オシヤレやなー」

と、ニヤリと笑う。

理容師「で、兄ちゃん何歳？」

大野「二十一歳……です……」

理容師「二十一かー」

大野「いやっ……昔は……ですけど……」

理容師「おもしろい事言うがな！やり手やな！」

と、笑みを浮かべて一步近づく。

理容師「ほならな、今の兄ちゃん何歳や？

未来の兄ちゃんと違うで」

大野「今は二十六、七……八歳……位で
す……」

理容師「その辺りを攻めとる訳か」

と、腕を組んで険しい表情をする。

理容師「ほならな、兄ちゃん二十代よりも
若々しく見せたいか、もつと大人っぽく見
せたいか、どっちが兄ちゃんの好みや？」

大野「大人っぽい……方が……いいかな……」

理容師「という事は、大人のダンディーへヤ
ーや」

大野、少し笑みを浮かべる。

鏡に映る自分の頭を見る。

大野「できたら……尖った感じに……しち
よつ……しつ……してもらえますか？」

理容師「尖らせる？」

大野「……はい」

理容師、目を細めて遠くを見る。

大きく息を吸う。

理容師「そういう事やったんかー。兄ちゃん
の好み、見抜いたで！」

店内にバリカンの音が響く。

○冬の日本海（夕方）

強い波が、岩に激しくぶつかる。

○散髪屋の店内

渋い演歌が流れる店内。

鏡に映っている、散髪台に座っている、角刈りの大野。深刻な目で鏡に映る自分を見ている。

理容師、笑みを浮かべて大野を見る。

理容師「どや？ 兄ちゃん好みで、男らしくてめっちゃめっちゃカッコええやろ！」

大野、深刻な目つきのまま、顔の下半分で笑顔を作る。

大野「はい！ 最高です！」

理容師、帽子を持ってやって来る。

理容師「もうめっちゃめっちゃカッコ良くなってもうたから、この帽子をかぶる必要はないな

「兄ちゃん！」

と、帽子を渡す。

大野「はい！」

と、深刻な目つきのまま笑顔を作り、帽子を受け取る。

○散髪屋の外

大野、扉から出てくる。

自転車に乗った女子高生集団、近づいて来る。

大野、帽子をかぶろうとするが、その手を止めて、散髪屋の方を振り返る。ガラス越しに大野を見ている理容師、手を上げて挨拶をする。

大野、帽子を下げ、手を上げて笑みを浮かべてから、前を向く。

女子高生集団、大野の前を通り過ぎる時、大野の頭の方へと視線を向け、急いで目を逸らしていく。

○鉄道沿いの細い道

大野、自転車を全力で漕いでいる。周囲の人々、大野の角刈りに目を向けては、急いで目を逸らしていく。

○大野の部屋

大野、ふすまを開けて入って来る。布団の凹んだ部分に座る。スマートフォンを操作する。画面に表示されている、吉澤誠一という文字を指で押す。

8

○吉澤家の外

二階建ての一軒屋。表札に吉澤と書かれている。

○吉澤の部屋

長髪で太っている吉澤誠一(28)、暗い部屋でゲームをしている。机の上で携帯電話が振動する。

吉澤、携帯電話を手取る。

画面には、大野弘二と表示されている。

吉澤、携帯を耳に当てる。

吉澤「はいー、もしもしー」

○大野家の台所(夜)

窓の外が暗くなっている。

リクルートスーツを着ている大野梓

(25)、エプロン姿の大野直子(57)、テ

ーブルに座って向き合ってる。

9

梓「でもお兄ちゃん誰と東京行くん？ここ

7年ぐらい外に出てないやろ？」

直子「吉澤君って子、覚えてる？」

梓「なつかしー、ヨッシーやろ？小学校の時

の友達やん」

直子「毎日ゲームの世界で会ってるんやっ」

梓「それで繋がってるんやー」

直子「そうみたい。これをきっかけに元気に
なってくれるといいけど」

階段を下りて来る足音が響く。

直子、梓、音のする方を見る。

その音が玄関の方に向かうと、扉の
開く音がして、閉まる音がする。

直子「さっそく外出やん！」

直子、梓、笑う。

○コンビニエンスストア（夜）

帽子をかぶった大野、店内を歩く。

ヤクザ関係の雑誌の前を通り過ぎる。
すぐに戻って来て、その本を手にして
開く。

着物を着た角刈りの親分の姿が掲
載されている。

大野、呆然とした表情で近くの鏡を
見て、ゆつくりと帽子を取る。

鏡には、親分とそっくりな角刈りをし
た大野の姿。

○大野の部屋（夜）

大野、テレビとゲームの電源をつける。

○大野の家のテレビ画面（夜）

CGで描かれた夜の道路沿。

o-noko-jis と頭の上に表示された

黒い背広を着た柄の悪い男キャラ、

立っている。

目の前にヘリコプターが下り来る。

柄の悪い男、乗り込む。

操縦席に、頭の上に44383と表示

された女性が座っている。

吉澤の声「こんばんわー」

大野の声「こんばんわ。バスの予約……でき
た？」

吉澤の声「その話やけどー、予定の日にー、
京都駅のー、所をー、十時にー、出
発！」

ヘリコプター、離陸を始める。

○道路沿いの歩道（夜）

大野、帽子をかぶって歩いている。
吉澤、その隣を、自分で切ったような
不揃いな短髪、無数の毛玉が付いて
いる服、巨大なリュックサックを背負っ
た姿で歩いている。

○大きな駐車場（夜）

数台のバスが止まっている。
大野と吉澤、バスの元に歩いて行く。

○バスの車内（夜）

乗客達が沢山乗っている。
大野と吉澤、乗り込んで来ると、座
席に座る。

○大きな駐車場（夜）

バスはゆっくりと走り出し、駐車場を
後にする。

○高速道路（夜）

バスが駆け抜けて行く。

○バスの車内（夜）

カーテンが閉まっていて薄暗い。

大野、正面を向いたまま、無言で座っている。

吉澤、上を向いて大きく口を開け、いびきをかいて眠っている。

バスが停車する。

運転手の声「30分間の休憩に入ります。

3時半に出発しますので、それまでにお戻りください」

○高速道路の駐車場（夜）

止まっているバスの扉が開く。

大野、吉澤、バスから降りて来る。

○高速道路の駐車場・トイレの前（夜）

大野、吉澤、歩いて来る。

黒塗りの高級車が止まっている。

吉澤、トイレの中に入って行く。

大野、自動販売機の元に行き、1本のジュースを買う。

○トイレの中（夜）

吉澤、個室の中に入って扉を閉める。

○高速道路の駐車場・トイレの前（夜）

大野、自動販売機の前でジュースを飲んでいる。

バス男（23）、バス女（21）、急ぎ足で歩いて来て、呆然とバスの方を見る。

バス男「何でもう出発してるの？」

大野、バスの方を見る。

大野の乗ってきたバスが、駐車場から離れて行く。

近くの時計は3時10分を示している。

バス男「運転手さん出発時間間違えてるよ！」

大野、バス男、バス女、自動販売機
の前で呆然と佇む。

小柄な男（23）、乗客達に近づいて
来る。

小柄な男「あー、京都発新宿行きバス
にご乗車されていた方々ですか？」

バス男「はいそうです」

小柄な男「そうですか。他に乗客の方はお
られますか？」

と、周囲を見渡す。

ドクター（50）、地味な顔（40）、その場
にやって来る。

小柄な男「乗客の方ですか？」

ドクター「そうだよ。どうなっているんだい？」

小柄な男「バスの運転手が乗客を置き忘
れて出発してしまっただけらしいんです。それで
隣の駐車場まで送り届ける為に参りま
した」

ドクター「早くしないと大切な用事に間に
合わなくなるじゃないか！」

と、不快な表情を浮かべる。

小柄な男「私達はその会社から依頼を受けただけなので、詳しい事は解らないんです」

ドクター、不快な表情で目を逸らす。

小柄な男、乗客達を見る。

小柄な男「お客様5名おられるようですか、これで全員ですか？」

大野、手を挙げる。

大野「あの……1人いるかもしえっ……しっ……しっ……しれません……」

小柄な男「そうですか。解りました！」

吉澤、ニット帽をかぶった姿で近づいて来る。

小柄な男「こちらへどうぞ！」

吉澤、小走りをして乗客達と合流する。

小柄な男「では皆さんこちらへどうぞ」

と、案内するよう歩き出す。

乗客達、ついて行く。

○高速道路の駐車場の隅（夜）

黒いジャージを着た大柄な男（23）、古い型式のワゴン車の隣に立っている。乗客達、小柄な男に案内されてワゴン車の前にやって来る。

小柄な男「どうぞお乗りになってください」
大柄な男、ワゴン車の扉を開ける。

○ワゴン車の車内（夜）

太った男（24）、運転席に座っている。
将軍（24）、助手席に腕を組んで座っている。

後部座席にはシートが3列並んでいる。

乗客達が乗り込んでいき、最後にバス男、バス女、シートの一列目に座る。
大柄な男、乗り込むと、一列目のシート正面の空間に間に座り込む。
小柄な男、続いて、大柄な男の隣の空間に座り込み、扉を閉める。

○高速道路の駐車場の隅（夜）

ワゴン車、駐車場から出て行く。

○ワゴン車の車内（夜）

窓から、他の車を次から次へと追いついていく光景が見える。

バス男、外を見ている。

眉をひそめる。

バス男「高速降りてない？」

隣のバス女、窓の外を見る。

窓の外に市街地と民家が見える。

バス男、目の前にいる小柄な男を見る。

バス男「あー、なんで一般道を走るんですか？」

小柄な男「うるせえんだよこの野郎！」

と、30センチはある刃物を取り出し、バス男に向ける。

隣の大柄な男、同じように刃物を取り出し、乗客達に向ける。

小柄な男「てめえら動くんじゃね！舐めた
真似したらマジ刺しちゃうよ！」

と、刃物を人質達に向けて睨み付け
る。

○峠道（夜）

ワゴン車、入り組んだ道を走っている。

○ワゴン車の車内（夜）

揺れ動く車内。

バス男、姿勢を変える。

小柄な男、バス男に刃物を近づける。

小柄な男「何やってんだてめえ！」

大柄な男、小柄な男を見る。

大柄な男「なんかあったら、あの一家みたい
にこいつら全員殺して埋めてやろうぜ！」

小柄な男「またやっちゃう?!それヤバいっし
よ！」

と、犯人達、笑い出す。

○ 廃工場の敷地（夜）

ワゴン車、入って来ると停車する。

○ 廃工場の倉庫（夜）

乗客達、開いた扉から入って来る。

背後の鉄の扉が閉められる。

鍵の閉まる音が響く。

乗客達、周囲を見渡す。

物置のような広く殺風景な空間。

隣にある小さな部屋。

ドクター、地面に敷かれている段ボー

ルの上に座って、大きなため息を吐く。

他の乗客達、探索を始めるように散

らばって行く。

○ 廃工場の倉庫の隣の部屋（夜）

吉澤、入って来る。

大きく分厚い棚だけがある。

携帯電話を取り出し画面を見る。

圏外と表示されている。

吉澤「あつ、あー…」

と、部屋から出て行く。

○廃工場の倉庫（夜）

地味な男、腕を組んで壁にもたれて
いる。

ドクター、段ボールの上に座っている。

吉澤、戻って来てドクターの隣に座る。

吉澤「ここはー、何もー、ないですねー」

ドクター「永遠に出られないかもしれないよ」

吉澤「永遠にですか？」

ドクター「彼らは笑いながら一家を埋めたと

話していた。快樂殺人犯かもしれない」

吉澤「あつ、あー。悪者やー」

バス男、バス女、戻って来る。

誰も何も話さない。静けさが漂う。

小柄な男、扉を開けて入って来る。

刃物を片手に、乗客達に近づいて来
る。

ドクター、立ち上がる。

ドクター「君達の望みは何だ？」

小柄な男、刃物に向ける。

小柄な男「1人1千万だ！」

ドクター「1千万……」

小柄な男「これからためえらが親戚や知り

合いに電話して集めんだよ！」

ドクター「払えば助けてくれるのかい？」

小柄な男「そうだ！払えなかつたら処刑

だ！とりあえず時間をやる。それまでに

処刑されるか、金集めるか考えとけ！」

と、倉庫から出て行く。

バス男、肩を落としてため息を吐く。

ドクター「悪く考える事はない。最高の結

果が出たんだ」

バス男「どこが最高なんですか！」

ドクター「相手の目的が快樂殺人ではない

事が解った。助かる方法が確実にある」

バス男「確かに、そうですね……」

ドクター「ここは落ち着かないな。場所を変

えるか」

と、敷かかれているダンボールを持ち上げ移動させる。

その下の床に、血まみれの服が数着落ちていた。

バス男「なんだこれ！」

と、後ずさりする。

バス女「こつ、これ子供の服よ！」

ドクターの足元に段ボールが落ちる。

ドクター「何て事だ……あの話は本当だった

のか……」

地味な男、腕を組んで壁にもたれた

まま、顔色一つ変えずに服を見ている。

吉澤「あつ、あー。こんな展開よくあるわー」

ドクター「君！」

と、吉澤の前に駆け寄る。

ドクター「他人事じゃないんだ！次は私達

がこうなってしまうかもしれないんだぞ！」

吉澤「あつ、あー、サスペンスやー」

と、遠くを見る。

ドクター、吉澤を見たまま呆然とす

る。

○廃工場の事務室（夜）

膝の高さ程の机。それを囲むソファ―
に、太った男、小柄な男、大柄な男、
座っている。

将軍、歩いて来る。

将軍「おい、そろそろ時間だ。奴らから奪い
取れるだけ奪い取って来い」

小柄な男、太った男、立ち上がる。

小柄な男「ああ」

と、太った男と離れて行く。

○廃工場の倉庫（夜）

大野はいない。

大野以外の乗客達、向き合って座っ
ている。

バス男「お金を払ったからって、ここから出し
てもらえるのかな」

地味な男「連中は四人。対してこちらは六

人」

ドクター「危険過ぎる。相手は武器を持っているんだ。平和的な解決を目指すべだよ」

鍵の開く音が響く。

小柄な男、扉を開けて入って来る。

鍵の閉まる音が響く。

ドクター、前に出る。

ドクター「私たちは要求を受け入れる。だから平和的な解決といこうじゃないか」

小柄な男「マジ物分りのいい野郎だな。じゃ

あ、朝になったら1人1人、外の部屋にある電話使って、家族や知り合いに手当たり次第金を振り込むように頼んで回してもらおう。1人2千万だ！」

バス男、バス女、表情を硬直させる。

ドクター「ちよつと待ってくれ。さっきは1千万と言っていたじゃないか」

小柄な男「てめえさっきの俺と今の俺のどっちを敵に回すんだ！」

と、刃物を向けドクターの前に向かう。

小柄な男「今の俺はマジヤバイよ」

ドクター「解った。ただ1つだけ提案させてくれないか」

小柄な男「舐めてんのかよこの野朗！」

ドクター「悪い話じゃない。1人2千万と言
うが、用意できる者もいれば、できない者
もいる。そうなれば君達の儲けは減ってし
まう。殺される者も増えてしまおう」

小柄な男「それがどうした！」

ドクター「そこでだ。1人2千万なら、6人
で1億2千万になる。それを全員の価値
と考えるのはどうだろう？」

小柄な男「どういう意味だこの野朗！」

ドクター「全員で1億2千万を集める」

小柄な男「払えねえヤツの分まで払えるヤ
ツが払うって事か？」

ドクター「そうだ」

小柄な男、笑みを浮かべる。

小柄な男「いいだろ。ならてめえら全員で1

億2千万。集まらなかったら全員処刑だ！文句はねえな！」

乗客達、無言で同意する。

小柄な男「よし決まりだ！」

と、笑みを浮かべて乗客達を1人1人見渡ししていく。

小柄な男「あん?!」

と、眉を潜める。

ナイフを乗客1人1人に向けていく。

小柄な男「1、2、3、4、5……あれ？」

と、もう1度同じ事を繰り返す。

小柄な男「1、2、3、4、5……てめえどこ

だこの野郎！」

と、周囲を睨み付けるように見渡す。

吉澤、手を上げる。

吉澤「自分はここにいますけどー」

小柄な男「てめえじゃねえよ！もう1人はど

こだこの野郎！」

と、隣の部屋の方に歩いて行く。

バス女「もしかして、脱出したのかも?!」

と、バス男と顔を合わす。

○廃工場の倉庫の隣の部屋（夜）

小柄な男、やって来る。

誰もいない。

小柄な男「この野郎！」

と、棚の裏に入って行く。

○棚の裏の空間（夜）

薄暗く狭い。

小柄な男、隙間をくぐって入って来る。

大野の右半身が、物陰の隙間からはみ出している。

小柄な男「てめえこの野郎！出て来い！」

と、大野の目の前に向かう。

大野、下を向いて怯えながら物陰から出る。

両手を振るわせている。

小柄な男「この野郎！舐めてんじやねえ

ぞ！」

と、ナイフを振り上げ、大野の帽子を吹き飛ばす。

角刈りが姿を現す。

小柄な男「あっ！」

と、角刈りを見上げて表情を硬直させて固まる。

大野、自分の頭を呆然と見上げて固まる小柄な男を見る。

※フラッシュ※

ヤクザ雑誌に掲載されている角刈りの親分の写真。

コンビニエンスストアの鏡に映った角刈りの大野の姿。

※フラッシュ終わり※

大野の両手の震えが止まる。

その手が、握りこぶしを作る。

小柄な男、目を見開いて角刈りを

見て硬直している。

大野の声「(ドスの利いた低い声)おどれ誰にメンチきつとんやコラ」

小柄な男、意識を取り戻したように

大野の顔全体を見る。

大野、眉毛を八の字にした険しい表情で、小柄な男を見下している。

小柄な男、飛び上がるように一歩下がって身構える。

大野「(ドス)さつさと答えんかいボケ。ドつき回されたいんかいワレ、オウ？」

小柄な男「いやっ……いやっ……あのっ……」

大野「(低)おんどりやーワシを舐め腐つとんかいコラボケ！」

小柄な男、大野に震える両手の平を見せる。

小柄な男「ちっ、ちがちがつ、ちがちがつ」

大野「(低)じゃかましいわいボケタレ！舐め腐つとんなら鉛の玉ドタマにブチ込んで海の中沈めてまうぞコラカス！」

小柄な男、全力でその場から逃げ出す。

○廃工場の倉庫（夜）

小柄な男、怯えた表情で足を空回りさせながら、乗客達の前を横切って行く。

激しく扉を叩く。

鍵の開く音がすると、急いで扉を開け、飛び出すように出て行く。

扉が閉まり、鍵の閉まる音が響く。

バス女、バス男、顔を合わせる。

バス女「何があったの？」

バス男、考える様に少し黙る。

バス男「そうか！解ったぞ！人質が脱出したんだ！」

と、走って隣の部屋に向かう。

バス女、吉澤の元にやって来る。

バス女「姿が見えなくなった方とお知り合いですよね。その人って、どんな人ですか？」

吉澤「えーっとー…」

と、視線を左上に上げる。

○吉澤の部屋のテレビ画面（回想）

CGで描かれた街。

44383 と表示された女性のキャラクター

ター。その隣に、О-П-О-К-О-И-3 と表示

された黒いジャケットを着たキャラクター

ー、道路を塞いで渋滞を作り、ロケット

トランチャーで全ての車を吹き飛ばす。

黒いジャケットを着たキャラクター、飛

んでいるヘリコプターから、突然パラシュ

ートも着けずに飛び降りる。

44383 と表示された女性キャラクター

ーの目の前で、黒いジャケットのキャラ

クター、無数の時限爆弾を付けた車

に乗り込んで、自分も一緒に吹き飛

ばす。

黒いジャケットを着たキャラクター、ビ

ルの上から、迎えに来たヘリコプターの

プロペラに飛び降り、遠くへ飛んで行ってしまおう。

(回想終わり)

○廃工場の倉庫 (夜)

吉澤、両手を箱を持つ形にする。

吉澤「怖い物知らずのー」

両手は右へ動く。

吉澤「過激派！」

バス女「そんな人なんですか!？」

吉澤「もう凄い過激でー、どんな事でもー、

やってしまおうー」

両手は右から右上へ。

吉澤「超人！」

ドクター、吉澤とバス女の元にやって

来る。

ドクター「過激なのは犯人達の方だよ」

バス女「でも、逃げて行った人、何か凄く怯

えてる感じでしたよ」

ドクター「人質が脱出をしたと勘違いして

焦ったんだろう」

地味な男、両腕を組んで壁にもたれて
ている。

地味な男「ここは連中が用意した場所だ。

そんな空間があるとは思えない。となると、
その男は格闘技を習得していたりするよ
うな、想定外の強者かもしれない」

と、無表情のまま一点を見ている。

○廃工場の事務室（夜）

大柄な男、ソファーに座って目の前に
立っている小柄な男を見ている。

小柄な男、倉庫の方を指さす。

小柄な男「あの中にマジやばいのが入っ
てる！」

大柄な男、缶ビールを握りつぶして、
勢い良く立ち上がる。

大柄な男「ザコ相手にビビってんじゃねえ！」

と、缶ビールを地面に叩き付け、それ
を踏み潰す。

大柄な男「ワオー！ワオー！」

と、マウンテンゴリラのように激しく胸を叩きだす。

将軍、その場にやって来る。

将軍「何があった？」

小柄な男「人質の中にヤバいのがいるんだ」

将軍、大きなため息を吐く。

小柄な男「いるんだって！見た目だって普通じゃねえし、言葉使いもマジやば過ぎんだ」

将軍「そんなヤツはいない。いるならこの場に連れて来る時に気づいてる。はい論破」

小柄な男「いるんだって」

将軍「なら論理的に説明してみろ」

小柄な男「論理的って……言われても……」
将軍「言い訳は後にしろ。さっさと人質と金の話しをつけてこい」

と、その場を後にする。

小柄な男、ソファアーの上に倒れ込む。

小柄な男「将軍は何も解ってねえ……」

太った男、その場にやって来る。

○廃工場の物置(夜)

乗客達、集まっている。

吉澤、ニット帽を取って、カバンの中に押し込む。

バス男、戻って来る。

バス女「どうだったの？」

バス男「誰もいないと思ったんだけど、棚の裏に空間があった。もう1人の人、怖くてそこに隠れてるんだよ。それで犯人は焦ったんだ。脱出できる場所はない」

と、ため息を吐く。

吉澤「あつ、あー。じゃあー、やつぱりー、

犯人よりもー、強いつて事やー」

バス男、眉を潜めて吉澤を見る。

ドクター「君達、それは危険な考え方だよ」

と、険しい表情を浮かべる。

腕を組んで壁にもたれている地味な男。

地味な男「だが、金を払っても助かる保障はない」

ドクター「何を言っているんだ。もう取引は成立している」

地味な男「金を払った後、証拠を消す為に殺されるぞ。俺達は連中の顔を見ているんだ」

吉澤「あー。そうやわー。あらまー。あー」
地味な男「戦う以外に生き残る手段はない」

ドクター「危険過ぎる！絶対反対だ！」

突然、扉が蹴破られるように開く。

大柄な男、刃物を握って入って来ると、そのまま隣の部屋に向かう。

○廃工場の倉庫の隣の部屋（夜）

大柄な男、入って来る。

大柄な男「出て来い！オラ！早く出て来い！」

と、棚を掴んで激しく前後に動かす。

○棚の裏の空間（夜）

揺れ動く棚。

大野の両足と両手が震えだす。

棚の上から、数個のサングラスが落ちてきて大野に当たる。

大野の足元に、埃を被った金色のフチのタレ目のサングラスが落ちくる。ガラスは上にいくほど色が茶色く、下に行くほど色が薄い。

○廃工場の倉庫（夜）

乗客達、隣の部屋の方を見ている。

バス男「何が起こってるんだろう」

地味な男「おそらく、隣の部屋のどこかにいる、想定外の人物を殺すつもりだ」

バス男「あの刃物で!!」

と、深刻な表情を浮かべる。

バス女「何とかしないと!」

バス男「でも、相手は刃物を持ってるし……」

と、顔を合せて動揺する。

大柄な男、その背後を、逃げるように全力で駆け抜けて行く。

大柄な男、扉の元に向かうと、焦るようにドアノブを左右に動かし開けようとする。

大柄な男「早く開けてー！早く！」

と、もう片方の手で扉を激しく叩く。乗客達、呆然と大柄な男を見ている。

大野の声「(低)待たんかいコラクソガキ！おどれ大阪湾ぶち込むだけでは済まさんぞボケ！」

扉が開くと、大柄な男、外に飛び出す。

○扉の外の通路(夜)

太った男、扉から出てきた大柄な男に押し飛ばされて地面に倒れる。

大柄な男、倒れた太った男を踏みつけて逃げて行く。

太った男、急いで立ち上がり、扉を閉めて鍵を閉める。

○廃工場の倉庫（夜）

乗客達、扉の方を見ている。

バス男、扉を見て笑みを浮かべている。

バス男「こつちにはもつと凄い人がいる！」

吉澤、両手を箱を持つ形にして右へ。

吉澤「隣の部屋にー」

箱を持つ形の手は左に動く。

吉澤「行ってみます？」

バス男「はい！その人に話したい事があります」

と、吉澤と小走りに隣の部屋に向かう。

○倉庫の隣の部屋（夜）

バス男、入って来る。

大野の声「（低）どう落とし前つけるつもりやコラボケ！」

バス男、笑みを浮かべる。

バス男「僕はバスの乗客です！」

吉澤、入ってきて大野の方を見る。

吉澤「あつ、あーあ！」

と、笑みを浮かべる。

○廃工場の事務室（夜）

小柄な男、ソファーの上で固まっている。
る。

大柄な男、ソファーの前に立っている。

大柄な男「逃げた方がいい」

小柄な男「だよな……」

太った男、走ってやって来る。

太った男「おい！何やってんだお前！俺を

踏みつけやがって！」

と、大柄な男に掴みかかる。

大柄な男、視線を合わせない。

太った男「何ビビってんだこの野郎！」

小柄な男「てめえじゃねよ。ヤクザにだ」

太った男「ヤクザ!!」

と、呆然として手を離す。

小柄な男「あの中にヤクザが入ってんだ！」

と、扉の方を指差す。

大柄な男、後ずさりをしだす。

大柄な男「警察呼んだ方がいいかもっ……俺は逃げるから、お前らも逃げろ！」

と、走って外に出て行く。

將軍、少しすると、その場にやって来る。

將軍「今度は何があった？」

小柄な男、泣きそうな顔を見せる。

小柄な男「中に恐ろしいヤツがっ！」

將軍「もう論破済みだ」

と、隣に立っている太った男を見る。

太った男「ヤクザがいるとか言いやがるんだ」

將軍「ヤクザだと？」

太った男「それでアイツ、警察呼んだ方がいいとか言っただけで逃げ出しやがったぜ」

將軍、仲間達を見る。

將軍「あの馬鹿野郎！」

と、ソファァーを蹴る。

追いかける様に大柄の男と同じ方向に走って行くが、立ち止まって振り返る。

小柄な男を指さして、太った男を見る。

將軍「こいつを見張っとけ。ここの電話も使わせるな。絶対に外にも出すな。解ったな」
太った男「あつ、ああ……」

將軍、走って出て行く。

○棚の裏の空間（夜）

バス男、大野の正面に座って、嬉しそうな表情を浮かべている。

バス男「犯人なんてただのチンピラですよ。たぶん今頃、本物の存在を怖がって縮こまっていますよ」

バス男の隣に座っている吉澤。

吉澤「この人はー、ヤクザじゃー、ないです」
バス男「えっ、違う？」

吉澤「この人はー、大野さんって人でー、一般の人！」

バス男「それだと……犯人と取引できない……」

吉澤「あつ、あー。じゃー、なりすましたらー、いいんじゃないですか？」

バス男「そうだ！それですよ！大野さん！

なんとかヤクザに成りすまして、犯人を説得してもらえませんか？ヤクザが相手なら、犯人もいい加減な事はできないはずですよ。それを利用して、ここから脱出するんです」

吉澤「あつ、あー、それでー、大野さんがー、外に出てー、警察にー、行けばー、解決や！」

バス男「それです！」

吉澤「あー、いい！」

と、力士のように手を叩く。

バス男「大野さん、この作戦、引き受けても
らえませんか？」

と、前のめりになって大野を見る。

○廃工場の隣の部屋（夜）

バス男、棚の裏から出て来る。

ドクター、そこに立っている。

ドクター「何をしているんだい？」

バス男「いい作戦があるんです」

ドクター「君！これは遊びじゃないんだ。おかしな事をすれば、全員に被害が及ぶんだ」

バス男、顔を横に振ってから離れる。

吉沢、黒一色のサングラスを装着して出てくる。

ドクター「何を考えているんだ君達は」

吉沢「すごいー、武器がー、あるんです」

ドクター「武器だつて？」

吉沢「そーなんです！」

ドクター「それは一体何だい!!」

吉沢「自分はー、あんまりー、詳しくなです。あの人がー、詳しいんです」

と、両手で箱を持つ形を作り、バス

男を示す。

○峠道（夜）

大柄な男、暗闇の中を走っている。

ワゴン車、走って来ると、照らし出された大柄な男を追い抜き、道を塞ぐように急停車する。

大柄な男、立ち止まる。

将軍、運転席の窓から顔を出す。

将軍「どこ行くつもりだ」

大柄な男「警察っ……」

将軍「馬鹿野郎！人質が怖くて警察に駆け込む誘拐犯がどこにいる！」

大柄な男、怯えた表情を見せている。

○廃工場の事務室（夜）

小柄な男、怯えるようにソファーに座っている。

太った男、やって来る。

太った男「ヤクザ見て来たぜ」

小柄な男、呆然と太った男を見る。

太った男「中覗き込んだらすぐ解ったぜ。だから言っちゃったぜ。調子に乗るなって。」

そしたら、はい、解りましただつてよ」

小柄な男「あのヤクザがそんな事いうはずがねえ？」

太った男「短くて変な髪型したヤツだろ」

小柄な男「そつ、そいつだ……」

太った男「もう棚の裏から出てきてるぜ。明るい所で見りやただのチンピラだぜ」

小柄な男「マジ……かよ？」

太った男「ああ。今から俺が金を搾り上げてきてやる。ついでに、お前らを脅した罰として、ヤキも入れてきてやるぜ」

と、ナイフを手にとって、不敵な笑みを浮かべる。

小柄な男、徐々にニヤニヤします。

○廃工場の倉庫（夜）

大野以外の人質達、集まっている。

吉澤、落ち着かない様子で周囲を見渡しだす。

バス男「どうしたんですか？」

吉澤「いやー、お腹の調子がなー……」

バス男、敷かかれているダンボールの一部を持って、その場から離れて行く。

部屋の隅に、段ボールの壁を作る。

吉澤の元に戻って来る。

バス男「仮説トイレを作ってみました」

吉澤「あつ、あー、ありがとうー」

と、サングラスを地面に置いて、段ボールの壁の中に入って行く。

太った男、刃物を片手に、扉を開けて入って来る。

乗客達の目の前で立ち止まる。

足元には、吉澤のサングラスが落ちて
いる。

太った男「あのチンピラ、棚の裏に逃げやが
ったな」

と、隣の部屋に向かう。

○棚の裏の空間（夜）

太った男、入って来ると、奥の方を睨みつける。

金色のフチのサングラスを装着した、角刈りの大野が大仏のように座っている。

太った男、口をあけて硬直する。

大野「（低）失礼ですが、お宅どこの組の方でっか？」

太った男、硬直したまま動かない。

大野「（低）解りましたで。あんた、ワシの所に挨拶に来たんとちやいますんか？ どないですんや？」

太った男「はっ……はいそうですっ！」

大野「（低）そうでっかー。せやったら、そないな所やのうて、どうぞこちらへ」

太った男、顔を引きつらせながら、大

野の元に行き、目の前で正座する。

大野「（低）それで、ここの責任者は誰でっか？」

太った男「せっ、責任者は……でっ出てます」

大野「（低）せやったら、あんたに聞いたらええ訳ですな」

太った男「はっ……はいつ」

大野「（低）ほならね、まず聞きたい事やけどもね、ワシは客人ですわな。そうですやろ？」

太った男「はいもちろんです！」

大野「（低）せやったら、ワシを客として招いて、お茶の一杯も出さんというのはどういう事ですんや、え！」

太った男「せっせせ……責任者の方がですすね、さっささ……さつき車で出て」

大野「（低）あのね！ワシはね、この場にやね、個人で来とる訳やないんですわ。組の代表として来とる訳ですわ」

太った男「組の代表!!」

大野「（低）そらそうでっしややるが。親分が組を背負わんなんておかしな話がある訳

ないんやからね。解りますやろ？」

太った男「……はい」

大野「（低）はいや解りませんやろが！解ってるんか解かつたらんのか聞いたりますんや！」

太った男「解かりますっ解ります！」

大野「（低）解ってますんやな？」

太った男「はいっ。あっ！解りますっ！」

大野「（低）せやったら、それを解っててお茶の一杯も出さんいう事は、あんた、ワシの顔に泥でも塗り腐ってますんか？」

太った男「いや違いますっ！」

大野「（低）違いますんか？」

太った男「違いますっ！違いますっ！」

大野「（低）せやったらワシの組の代紋に泥を塗って全面戦争しかけてるいう事やないかいコラ！」

太った男「そんなつもりはないですっ！」

大野「（低）せやったらどういうつもりやコラ！バラバラにして沈めてまうぞクソガ

キ！」

太った男、自分の両腕に身を隠して
震えあがる。

太った男「すーっ、すいませんでした！」

と、土下座をする。

そのまま、数秒が経過する。

大野「（低）兄ちゃん頭上げ」

太った男、元の体制に戻る。

太った男「ゆっ、許してもらえるんですか？」

大野「（低）そこまでされてもうたら、ワシは
もうええ思うとる。せやけどな、ワシかて
親分や。このままではワシの子分があんた
を許さん訳ですわ」

太った男「怒らせてしまったんですか……」

大野「（低）そらそやがな。ワシらの世界の人
間は怒ったらもうぶち殺してまうがな」

太った男、目を見開いて黙り込む。

大野「（低）ワシを無視してますんか？」

太った男「ききつ聞こえてますっ！」

大野「（低）ワシかてな、兄ちゃんが礼儀尽く

してくれたと、若い衆に言いたい訳や。せやけどな、ワシの事を思うてくれとる若い衆に、嘘なんてつかれへんがな。解るやろ」

太った男「はい……」

大野「（低）せやったら、兄ちゃん、どないするつもりですんや？」

太った男「まず、お茶を出させてください」

大野「（低）ワシはそれでもええ思うけどもやな、それでは若い衆があんたを許さんのと違うか？」

太った男「何がっ、あの、何が必要ですか!？」

大野「（低）そらこんな場所やのうて、しっかりとした場所で誠意見せるんが筋とちやうか？」

太った男「寿司を注文しますっ！」

大野「（低）出前で済ます訳やな」

太った男「いやっ……」

大野、顔を横に向ける。

大野「（低）ワシの所の若い者がそれを聞いたら、あんたが出前用意するように、拳銃

と鉛の弾用意しおるやろうなー」

太った男「板前この場所に連れて来てます！」

大野「（低）そこまでもせんでも、店までならワシかて動いたるがな」

太った男「親分さんに手間は取らせられませんっ！今すぐ連れて来ますっ！」

と、逃げ出すように走って出て行く。

○廃工場の倉庫（夜）

太った男、怯えた表情をして扉の元に走って行く。

扉を叩く。開くと、外に飛び出す。

バス男、握りこぶしを強く振る。

○棚の裏の空間（夜）

バス男、入って来ると、大野の目の前に滑り込む。

バス男「どうなりました!!」

大野「外には……出してくれませんでした」

バス男「やつぱり、無理でしたか」

と、視線を落とす。

バス男「電話さえ繋がれば、警察に連絡できるのに……」

と、黙り込む。

勢い良く顔を上げる。

バス男「そうだ！さっき犯人が言っていました。

この扉の外に電話機があるって！それを使えば、警察を呼べる！」

と、大野に近づく。

バス男「大野さん、犯人をうまく騙して、外の電話を使えませんか？」

大野、考えるように黙ってから、天井を見上げる。

大野「いい方法がある！」

バス男「いい方法？」

大野「あの……携帯電話を……貸してもらっても……いいですか？」

バス男「ここだと繋がらないですよ？」

大野「はい……大丈夫です」

バス男、携帯電話を渡す。

○廃工場の倉庫（夜）

乗客達、吉澤、座っている。

バス男、吉澤の元にやって来る。

バス男「お腹は大丈夫ですか？」

吉澤「あー、おかげさまでー、もう大丈夫！」

と、両手の親指を立てる。

太った男、缶コーヒーを持って扉を開けて入って来る。

乗客達の横を通り過ぎ、隣の部屋の方へ向かう。

○棚の裏の空間（夜）

太った男、入って来る。

大野、背を向けて座って、携帯電話を耳に当て小さな声で何かを話している。

太った男、大野を見て立ち止まる。

大野、突然立ち上がる。

大野「（低）そうか出発したか！ よっしや解った！ それとな！ ……もしもし!! ……もしもし!!」

と、携帯電話を耳から離して画面を見る。もう一度耳に当てる。

大野「（低）もしもし！ 本部長！ ……本部長！ ……」

と、携帯を耳から離す。

大野「（低）こんな重要な時に途切れおって。何の為の改造携帯や！」

と、太った男の方へと振り返る。

大野「（低）なんや、さっきの兄ちゃんか」

太った男「何があつたんですか？」

大野「（低）あんたらえらい事してもうたのう。

今、総本部から連絡が入った。ワシの携帯の電波を探知して、組の者がこの場所を見つけ出したみたいや。それで今、特攻隊が出発した！」

太った男「特攻隊!!」

床に落ちる缶コーヒー。転がっていく。

大野「（低）ついに全面戦争が始まってもうた訳や」

太った男「どっ、どどどどうなるんですか!？」

大野「（低）そらーダンブカーで壁ぶち破って、機関銃使っただけであんたらに鉛の弾ぶち込ん
で手榴弾でドタマ吹き飛ばして海ん中沈
めて魚の餌にしてまうだけや」

太った男「そんな……」

大野「（低）攻撃をやめさせようにも、電波
の状態が悪くて通話が途切れてまう。こ
れでは指示の出しようがあらへん」

太った男「ちよつと待っててくださいっ！」

と、逃げるように外に出て行く。

○廃工場の事務室（夜）

太った男、ソファアの横を全力疾走
で走り抜けて行く。

小柄な男、後ろから追いかけて来る。

小柄な男「おい！待ってって！どこ行くん

だ！」

太った男、そのまま外に出て行く。

○峠道（夜）

太った男、全力で走っている。

正面からワゴン車がやって来る。

太った男の目の前で停車する。

將軍の声「何やってんだ」

太った男「助けてください！」

と、運転席に近づく。

將軍、運転席から無表情に太った

男を見ている。

太った男、將軍を見て驚く。

將軍「お前、なんでこんな所にいるんだ？」

太った男、口を閉じる様に横に伸ば

して、瞬きを連発する。

將軍「まさか、アイツが逃げ出しのか!!」

太った男「あいつは倉庫にいるぜ！」

將軍「じゃあ何でお前がここにいるんだ？」

太った男、黙り込んで、口を閉じる様

に横に広げて瞬きを繰り返す。

將軍「おい！」

太った男「逃げっ……將軍を探してたんだ！」

將軍「何があった？」

太った男「人質の中にヤクザの親分がいる！」

將軍「お前まで……」

と、顔を逸らす。

※フラッシュ※

高速道路の駐車場のトイレの前に止まっている黒塗り高級車。

※フラッシュ終わり※

將軍の表情が硬直する。

將軍「まさか……」

と、太った男を見る。

將軍「お前、人質連れて来る時、間違っ
て関係ない奴連れて来てないだろうか？」

太った男「俺は運転役だぜ。そんな事より、俺達の居場所が組織に知られたぜ！」

將軍「何言ってるんだ？」

太った男「ヤクザが本部長と電話で話してた」

將軍「倉庫の電話を使わせたのか!!」

太った男「あの部屋で携帯を使ってたんだ」

將軍「なんだと!？」

と、大きく目を開ける。

○ワゴン車の車内（夜）

將軍、運転している

太った男、大柄な男、下を向いて後

部座席に座っている。

將軍「おそらく携帯のGPS機能でこの場所を測定したんだろう。だが心配するな。

携帯のGPSは精度が低い。それも倉庫の中じゃ使えない。だから俺たちを見つけ出すには相当な時間がかかるはずだ」

太った男「でも見つかったら終わりだぜ！」

將軍「落ち着け。今問題なのは携帯が通じた事だ」

と、険しい表情を見せる。

○廃工場の敷地（夜）

ワゴン車、走って来ると停車する。

○ワゴン車の車内（夜）

エンジンが切られ静かになる。

將軍、運転席から正面を見ている。

將軍「よし。今から人質達から携帯を奪い取って来い！」

小柄な男、大柄な男、後部座席に座って黙り込んでいる。

將軍「聞こえねえのか！」

太った男「でもヤクザが……」

將軍「ヤクザはどうでもいい。警察に通報するのは他のヤツらだ」

太った男「棚の裏にいるんだぜ」

將軍「棚の裏にいるなら放っておけ」

と、太った男の肩に手をのせる。

將軍「今は人質だ。お前が行くって言うなら、取り分を2倍にしてやる」

太った男「2倍……」

將軍「そうだ。2倍だ」

と、無表情に太った男を見ている。

太った男、少しニヤリとする。

○廃工場の事務室（夜）

將軍、太った男、大柄な男、戻って来る。

將軍、座っている小柄な男の胸ぐらを掴む。

將軍「お前、ちゃんと確認しないで人質を連れて来ただろ！」

小柄な男「確認したって」

將軍「じゃあなんでヤクザがいるんだ！」

小柄な男「何でって、マジ解んねえよ……」

將軍「おかしなヤツがいただろ」

小柄な男、考えるように視線を逸ら

す。

小柄な男「そーいや、乗客が1人トイレに行ってるヤツがいるって言った。その後で近寄って来たヤツがいて、俺は何も聞かずにそいつを連れて来ちまったかも……」

將軍、小柄な男を離して背を向ける。

將軍「という事は、俺達が連れて来るはずだったバスの乗客は、まだトイレの中にいた。お前が連れて来た相手は、乗客とは全く関係のないヤクザの親分だ」

小柄な男「マジ……かよ……」

將軍「あの駐車場のトイレの前に怪しい車が止まってただろ！」

小柄な男「やっちまった！」

と、両手で頭を抱える。

○廃工場の倉庫（夜）

太った男、隣の部屋を警戒しながら、乗客達に刃物を向けている。

太った男「（小さな声）携帯電話を出せ！」

目の前に立っているバス男、地味な男、
無言で太った男を見ている。

太った男「（小さな声）携帯はどうした！」
地味な男「もつと大きな声で言ってくれ」

太った男、驚いたように目を見開く。
地味な男「それと、人質は6人いるんだろ。
なら俺は最後だ」

太った男、身動きが取れなくなる。
バス女、その様子を見て一歩前に出
る。

バス女「私もそう思う。全員から平等に取
らないなら、私も渡さない！」

ドクター、前に出て乗客達の方を向
く。

ドクター「感情的になつてはいけない！平和
的な解決を目指すんだ！」

と、姿勢を整え、太った男の方を
いて携帯電話を差し出す。

ドクター「これで無駄な争いはなしにしよう」
誰もそれに続かない。

太った男「お前ら……タダじゃ済ませねえぞ！あつ！」

と、手で自分の口を押さえ、隣の部屋の方を見る。

逃げるように出て行く。

バス女、前が出る。

バス女「逃げて行ったよ！全然怖くも何ともなかった！」

バス男、バス女に近づく。

バス男「僕もだよ。結局、僕達が恐れていたのは犯人達じゃない。自分の中にある恐怖だったんだ」

ドクター「馬鹿な事を言っちゃいけない！こんな事をすれば、相手はより過激な手段をとってくるぞ！」

バス男「そうなれば、僕達は更に強く立ち向かうだけです！」

ドクター「無謀過ぎる！悲劇を招くだけだ！」

と、背を向け、大きなため息を吐く。

○廃工場の事務室（夜）

太った男、深刻な表情を浮かべて、
將軍と小柄な男の前に立っている。

將軍「今度はいつたい何なんだ？」

太った男「人質が反抗しだした！」

將軍「あの野朗ども！」

と、立ち上がって机を蹴る。

考える様に黙り込む。

静けさが漂う

將軍「よし、見せしめとして一人消すぞ」

太った男、小柄な男、硬直させた表情で將軍を見る。

○廃工場の倉庫（夜）

扉が勢い良く開く。

小柄な男、大柄な男、太った男、刃

物を持って入って来る。

乗客達を取り囲む。

小柄な男「俺達に文句があるヤツは手を
上げろ！」

乗客達、誰も手を上げない。

小柄な男「嘘つくんじゃねえ！」

と、バス男に刃物を向けて近づく。

バス男、歯を噛みしめ、握りこぶしを作り、怯えながらも堂々と身構える。

ドクター、前が出る。

ドクター「私だ！私が指示をした！」

と、手を挙げる。

小柄な男「てめえか！」

犯人達、3人がかりでドクターを引きずる様に連れて、扉の外に出て行く。

扉が閉まり、静まり返る。

バス女「あの人、どうなるの？」

乗客達、顔を見合わせ黙り込む。

バス男「全部俺のせいだ……。あの人言っただ通りだった。なのに、あの人皆を守る為に名乗り出たんだ。それなのに僕は……

……僕は……」

と、悔しそうな表情で地面を見て握

り拳を作る。

○廃工場の事務室（夜）

誰もいない。静けさが漂っている。

○廃工場の倉庫（夜）

乗客達、黙り込んでいる。

扉が開く。ドクター、血まみれの姿で押し飛ばされるように入って来て、地面に倒れ込む。

扉が閉まる。

バス男「大丈夫ですか！」

と、走ってドクターの元に向かう。

ドクター、苦しそうに呼吸する。

ドクター「かつ、彼らは……きつ危険だ……これ以上逆らえば……全員殺される！」

バス男「全部僕のせいです。間違っていました」

ドクター、扉の方を指差す。

扉の前には薬が落ちている。

バス男「あれをとってこないか」

バス男、取りに向かう。
薬を拾うと、扉が勢い良く開く。
入って来る大柄な男、太った男、バス男を捕まえて外に引きずり出す。
勢い良く扉が閉まる。

○廃工場の通路（夜）

バス男、大型犬用の檻の中に閉じ込められている。それに乗せた台車が、薄暗い通路を突き進んで行く。

○廃工場の狭い物置（夜）

バス男を閉じ込めた大型犬用の檻に乗せた台車が止まる。

小柄な男、檻の中のバス男を睨む。

小柄な男「てめえら何企んらんだ！」

バス男「僕達の負けだ。もう逆らわない」

小柄な男「とぼけんじゃねえ！」

と、刃物を取り出しバス男に向ける。

小柄な男「てめえら武器持ってんだろ」

バス男「武器を持ってるのは君じゃないか」

小柄な男、刃物を握っているのとは逆の腕で、檻を強く叩く。

小柄な男「痛て！」

と、その手を反対側の脇に挟み、痛みに耐えるように下を向く。

バス男を睨みつける。

小柄な男「てめえ何しやがんだ！ 痛えじゃねえかこの野朗！」

バス男「何もしてないじゃないか」

小柄な男「武器が何か言わないなら、今からマジで刺すまで10秒前数えてやるよ！」

と、刃物の先端を檻の網の隙間に差し込む。

バス男、怯える。

小柄な男「マジ10、マジ9、マジ8」

バス男、目が左右に泳ぎだす。

小柄な男「マジ7、マジ6」

バス男「待ってくれ。本当に解らないんだ」

小柄な男「マジ5、マジ4、マジ3」

バス男、慌てだし、必死に檻の扉を開けようとする。

小柄な男「早く答えないと、マジで刺すまで

2秒前！マジ1！」

バス男「ニンジン！玉ねぎ！ピーマン！」

小柄な男「舐めてんじゃねえぞこの野郎！」

バス男「解らないんだ！だからそれが頭に浮

かんなんだ！嘘じゃない！本当だ！」

小柄な男、黙ってバス男を睨み続ける。

立ち上がり、その場から離れて行く。

バス男、一息つく。

小柄な男の声「駄目だ。あいつら俺達の事

マジ舐めてやがる。武器が何か聞いたら、

ニンジンとたまねぎとピーマンだってよ」

太った男の声「ヤクザがいるからだぜ」

バス男、興味深く声のする方に耳を向ける。

○廃工場の事務室（夜）

將軍、小柄な男、太った男、大柄な男、向き合っている。

小柄な男「これからどうすんだよ將軍」

將軍「ヤクザを追い出すしかない」

小柄な男「外に出したら俺達が殺される！」

太った男「そうだ！あのヤクザ、拳銃持っているかもしれないぜ」

小柄な男、目と口を大きく開け呆然とし、ゆっくりと太った男の方を見る。

將軍「だから縛って外に捨てるんだ」

小柄な男「そんな事したら撃たれる！」

將軍「酔い潰すんだ」

と、その場から離れる。

すぐに紙パックが数個入ったビニール袋を持って戻って来る。

將軍「まずはこれを使え」

と、袋の中から鬼殺しと書かれた紙

バックを並べる。

○棚の裏の空間（夜）

太った男、鬼殺しの入った袋を持って、
大野の元にやって来る。

太った男「差し入れを持ってきました」

と、大野の前に座って、鬼殺しのパツ
クの入った袋を手渡す。

大野「（低）それなんですんや？」

太った男「僕が大好きなお酒です」

大野、何かを考える様に黙る。

太った男「あつ、もしかしてお酒はあんまり……」

大野「（低）こらわざわざ、ごくろうさんです」

と、受け取って鬼殺しを取り出す。
ストローを指し、酒を吸い込むとパツ
クが凹む。次に、酒がストローを下って
行き、バックが膨らんでいく。

大野、飲み込む音だけを響かせる。

大野「（低）こらー美味しい。あんたも飲みなは

れ」

と、もう一つの紙パックを渡す。

太った男、両手の平を見せて振る。

太った男「自分はいいです」

大野「（低）あのね！ワシはね！酒だけを飲んだる訳やないんですわ」

太った男「はい？」

大野「（低）あんたがワシの事を思っていて、こんなに美味しい酒を持って来てくれたからやね、その誠意を受け止めとる訳ですわ。せやからワシも、あんたが好きや言うてたこの酒を使うて、同じように誠意を見せ返しとる訳ですわ。解りますやろ？」

太った男「……はい」

大野「（低）せやったら、あんた、ワシの誠意」

と、前かがみになって太った男に近づく。

大野「（低）どないするつもりですんや？」

太った男「いっ………いただきます………」

と、ストローを刺して、酒を吸い込む。

パックが凹み、喉が鳴る。

太った男「あああああ！」

と、苦しそうにパックを置く。

太った男「親分さんの優しさを感じました」

大野「（低）ワシはそんなええ人間やない。人を7人殺しとるんや」

太った男、大野を見たまま瞬きをしなくなる。

大野「（低）せやから京都のやな、宇治のバス停の下に武器ごと死体が埋まつとるがな。いやいや、アカンアカン。兄ちゃん聞き上手やし、酒があるからいらん事話してまうがな」

太った男「へっ、変な事聞いて……すいません……」

大野「（低）ええんや、ええんや。こんなもん別に大した事やあらへんがな」

太った男「大した事じゃない!!」

大野「（低）普通の事ですわ」

太った男「普通!!」

大野「（低）そらそやがな。特攻隊なんてロケットランチャーで吹き飛ばしとるがな」

太った男「（低）ロケットランチャー!!」

大野「（低）それが今やがな。特攻隊がここに向ってもうとるんや。せやから、今はそれをどないするかを話し合うべきなんとちやうか？」

太った男「あのつ、あの……、ぼつ、僕にはどうにもできないんで、せつ、責任者に言ってきます」

大野「（低）よっしゃ解った！任せたで兄ちゃん！」

太った男「はい！」

と、全力で逃げるようにその場を後にする。

○廃工場の事務室（夜）

將軍、大柄な男、ソファーに座っている。

太った男、將軍の元に走って来る

太った男「大変だ！」

將軍「今度は何だ!!」

小柄な男、走ってその場にやって来る。

太った男「特攻隊はロケットランチャーを俺達に使うつもりだぜ！」

將軍、呆然と視線を逸らす。

將軍「まさか……九州のヤクザじゃ……」

小柄な男「どういう事だよ？」

將軍「前に九州のヤクザからロケットランチ

ャーが押収されたってニュースを見た覚えがある。確か、抗争の時は常に機関銃と手榴弾を使うって話だった」

太った男「あのヤクザの言ってた通りだ！機

関銃と手榴弾を使って俺達を魚の餌にするって言ってたぜ！」

將軍、勢い良く立ち上がる。

將軍「なら間違いない。相手は九州のヤクザだ」

と、背を向ける。

○廃工場の狭い物置（夜）

バス男、織の中で強烈な笑みを浮べている。

将軍の声「俺達はとんでもない相手連れ
て来てしまった……」

バス男、口を押さえて笑いをこらえ
るが、喉の辺りから口を閉じてくしゃみ
をしたように笑い出す。

将軍の声「これで解ったぞ。武器と作戦は
特攻隊の事だ。それを人質が知ってるっ
て事は、既に人質達はヤクザの影響下だ」
小柄な男の声「だから反抗しただのか……」

○廃工場の事務室（夜）

座っている太った男、小柄な男、大
柄な男、不安そうにしている。

将軍、背を向けて立っている。

太った男「多分、人質達も言う事を聞か
ないとミンチにされるんだ。だから俺達に

……」

大柄な男、吐きそう口を押さえ、急いでトイレに方に走って行く。

小柄な男、大柄な男、深刻な表情を浮かべる。

将軍「こうなったら、武藤呼んでヤクザと話しをつけてもらうしかない」

小柄な男「武藤って、もしかしてヤクザになつたって噂の、あの武藤か？」

将軍、振り返って、険しい表情で頷く。

○廃工場の敷地（夜）

黒塗りの高級車がやって来る。

○廃工場の事務室（夜）

将軍、小柄な男、太った男、机を挟んで、武藤秀樹（むとうひであき）と向かい合って座っている。

武藤「なるほどな。そういう事か」

将軍「頼めるか？」

武藤「無理ではない。だけど、親分ともなれば大事だ。俺だけでは話をつけられない」

将軍、小柄な男、太った男、呆然と

武藤を見ている。

武藤、遠くを見て口から空気を吸う。

武藤「しゃーねーなー。昔からの仲のお前に、そこまで頼まれたら断れねえな。とりあえず、オヤジに連絡してみるか」

と、スマートフォンをポケットから取り

出して見る。画面にはヤクザの代紋の

壁紙。アンテナは圏外になっている。

武藤「ここは電波がねえのか……」

小柄な男、立ち上がる。

小柄な男「こっちに電話機が」

と、武藤を案内して離れて行く。

将軍、太った男、無言で待っている。

小柄な男、戻って来て座る。

武藤、少しすると、ゆっくりと歩いて

戻って来て、元の場所に座る。

武藤「とりあえずオヤジに連絡してきたから、

これで本格的に話をつけられる。後はお前ら次第だ。どうだ？」

將軍「できる限りの事をするつもりだ」

武藤「今の言葉で決まりだ。そこまで覚悟できてるなら、後の事は俺に任せとけ」

將軍、安心するように一息吐く。

○棚の裏の空間（夜）

武藤、重々しい歩き方で入って来る。

大野、大仏のように座っている。

大野「（低）失礼ですが、お宅どちらさんですか？」

武藤「あの連中に頼まれましたね、話をつけに来たんですよ」

と、大野の前に座る。

胸ポケットから名詞を取り出す。

武藤「自分はどういう者です」

大野、受け取って名詞を見る。

心臓の音が早くなる。

武藤「で、お宅はどちらですか？」

大野「（低）悪いけども、今その話は無しや」

武藤、勢い良く立ち上がる。

武藤「何だと！ てめえが先に聞いたんだろ！ こっちは名刺まできつてんだぞ！」

大野、名刺を持つ片手が震える。

武藤「答えねえと埋めちまうぞこの野郎！」

大野、震える手が止まる。

大野「（低）こんな無様な状態で正体明かせまへんがな。ワシかて下の者がおりますんや。そこを解ってもらえまへんか？」

武藤、大野を見たまま黙り込む。

武藤「そういう事かー。いや、こんな経験はないもんで気づかなかった。こりや申し訳ない」

大野「（低）ええんですわ。それにやね、この状態で組織名出して話がこじれてまえば、それこそ全面戦争ですわ。あんたはワシの状態を受け止てくれた器もある。せやから、ワシも誠意見せますさかい、ここは組織と組織やのうて、男と男で話しましょうや」

武藤「そこまで見込まれたら断れねえな」

と、座る。

武藤「今回の用件だけど、外の連中はバスの乗客とお宅を間違えて連れて来たみたいなんですよ。でもお宅に迷惑をかけた事は事実だし、アイツらがこのままでは済まされないのも解ってる」

大野「（低）そうでつか。それで、どないするつもりですんや」

武藤「まず、お宅はどれ位なら納得してくれますか？」

大野「（低）十万でええですわ」

武藤「十万!!」

と、驚いた顔をする。

武藤「一家の親分が十万なんて少な過ぎる」

と、疑うような目で大野を見る。

大野、武藤を見て黙り込む。

サングラスの中の瞳が左右に動き回ってから、止まる。

大野「（低）……。その言葉を待つとりましたで」

武藤、口を空けて呆然とする。

大野「（低）ワシが十万や言うて、はいそうですかなん言うたら、ワシの事を男やと認めてへん事になる。せやけどアンタは、ワシの事を男やとしつかりと認めて、十万では少な過ぎるとまで言うてくれた。それでこそワシが認めた男や」

武藤、顔がゆつくりと笑顔になる。

武藤「そりや俺もヤクザですよ。お宅がただ者じゃない事ぐらい解りますよ」

大野、笑いそうになり口元が少し動く。

大野「男の生き様見せてもらいましたわ。こはあんたの器の大きき見込んで、あんたの考えとる額で通しましょうや」

武藤「なら、詫びとしてとりあえず2千万。

これで目を瞑ってもらえませんか？」

大野、ゆつくりと深く3度頷く。

大野「その誠意、受け止めさせてもらいますわ」

武藤「なら、これで組の若い者を止めてもらつて、目を瞑ってもらえますか？」

大野「もちろんですわ」

武藤、一息ついてから、両足を叩いて、気合を入れて立ち上がる。

武藤「じゃあ、話しつけてきますんで、待っていて下さい」

と、その場を後にする。

○廃工場の事務室（夜）

將軍、太った男、小柄な男、武藤と向き合つて座っている。

武藤、大きく息を吸う。

武藤「ヤスオ、七千万！」

將軍「七千万だつて!!」

武藤、頷く。

將軍「高過ぎる。それじゃ俺達の儲けの半分以上じゃないか」

武藤、机に手を付き、身を乗り出すようにして将軍に顔を近づける。

武藤「相手は一家持つてる親分だ。本来ならこの程度の額では済まされない。俺が無理を承知で頼み込んで、やっこの額で引き下がるって言ってくれたんだ」

将軍「せめて1千万位にならないか？」

武藤「この事件でお前らが儲ける額を考えれば、それが筋つてもんだ。こつちもガキの使いじゃねえんだよ」

将軍「一千万以上は無理だ」

武藤、机を叩く。

武藤「お前さつきでできる限り努力するって言ったよな！ 約束したのを俺は聞いたぞ！ ヤクザ騙すのか！」

将軍「いい加減にしてくれ」

と、目を逸らす。

武藤、将軍の肩に手を乗せる。

武藤「ヤスオ。お前とは長い付き合いがあるから助けてやりたいんだよ。その為にはな、

相手に納得される事をしないと済まないんだ。それにな、お前の為にあの親分と話をつけた、俺にも面子があるんだ」

將軍「それは解ってる。だからもう少し安くならないのか？」

武藤「どうしても無理なのか？」

將軍「無理だ」

武藤、將軍から離れるようにソファーにもたれて、大きく息を吸う。

武藤「しゃーねーなー。そうか解った。お前がどうしても無理って言うなら、俺も一

肌脱ぐ。5千万で何とかしてやるよ」

將軍「なら2千万だ。それで十分だろ」

武藤、机を叩いて身を乗り出す。

武藤「ヤスオ！半分以下の額で十分ってどういう事だ！」

將軍、立ち上がって、その場を去ろうとする。

武藤、立ち上がる。

武藤「待てオラ！そんな都合のいい話は通

らんぞ！俺は組の名刺まで見せて相手に話通してんだ！どう責任とるつもりだ！」

将軍、答えない。

武藤「払わねえなら詫び入れろ！」

将軍「2千万なら払う！」

武藤「その額でどうやって九州のヤクザと、俺と俺のオヤジを納得させるんだ？このままだと大変な事になるぞ」

将軍、無表情に武藤を見る。

武藤「俺はこれから事務所に戻って話を通してくる。もう子供の遊びの世界じゃないんだ。解るだろ。昼までに連絡して来い」

と、倉庫から出て行く。

小柄な男「マジどうすんだよ」

将軍、何も答えない。

小柄な男「マジどうすんだよ！」

将軍「黙ってる！今考えてるところだ」

と、同じ場所を行ったり来たりする。

太った男、小柄な男、不安そうな表情で将軍を見ている。

將軍の足が止まる。

將軍「よし。次に武藤が来るまでに人質から金を奪ってここを脱出する」

太った男「奪うって、人質は俺達に反抗してんだぜ」

將軍「言う事を聞かせる為に」

と、一点を見て無表情になる。

將軍「あのヤクザを殺すぞ」

太った男「何言ってるんだ！相手は九州の武等派ヤクザだぜ！」

將軍「だからだ」

太った男「その後に狙われるぜ！」

小柄な男「武藤はどうすんだよ!! 2つの組織を敵に回すなんてマジヤバ過ぎだって！」

將軍「心配するな。金を奪い取ったら、その足で海外に移住だ。そうすりゃ問題ない。

後は、こう言う時に役に立つ頭の悪い先輩を使えばいい」

小柄な男、顔を硬直させる。

小柄な男「まさか塚本先輩呼ぶつもりじゃ

……」

將軍、ゆっくりと深く頷く。

小柄な男「マジやべーって！あの人だけは駄

目だって！」

將軍「心配するな。あの人は頭が悪い」

小柄な男、怯えた表情を見せる。

○工場の更衣室（夜）

大柄な男、太った男、無言で地べたに座っている。

○廃工場の事務室（夜）

小柄な男、ソファーに座って貧乏ゆすりをしていると、その足が止まる。

外から、アクセルを強く踏み込むと、すぐに減速をする。またアクセルを強く踏み込むと、すぐに減速する車の排気音が聞こえてくる。

小柄な男、口を大きく開けて、深刻な表情を浮かべる。

将軍。やって来る。

将軍「塚本先輩が来る。迎えに行くぞ」

と、先に外に向かう。

○廃工場の敷地内（夜）

白一色の型遅れの大型セダンが、敷地に入って来て、将軍と小柄な男の目の前に停車する。

塚本純一（27）、車から降りてくる。

小柄な男「塚本先輩！おはようございませす！」

塚本、小柄な男を見る。

塚本「お前だれ？」

小柄な男「自分、吉井っす！」

塚本、ニヤリとする。

塚本「鼻クソマン？」

小柄な男、嘘笑いをする。

小柄な男「おもしろ過ぎっす！自分、鼻クソマンっす！」

塚本「ふっははっ！ふはっ！ふははっ！」

と、黒くなった歯を見せて笑う。

○廃工場の事務室（夜）

塚本、ソファ―に座って、靴を履いた
まま机の上に足を置いている。

その正面に將軍、小柄な男、座って
いる。

塚本「で、いくら手に入るんだ？」

將軍「1千万です」

塚本「そうか。じゃあ俺が6百万もらう。

予想より多く入ったら俺に全部渡せ」

小柄な男「それだと、ちよつと多過ぎません
か？」

塚本、足を上げて机を叩くように強
く踏みつけ、小柄な男を睨みつける。

小柄な男「いやっ……俺達がそんなに頂いて
も……マジよろしいんですか？」

塚本、目を逸らしてアゴをかく。

塚本「そうだなー。やっぱり八百万だ。いい
だろ？」

將軍「はい。大丈夫です」

塚本、笑顔になる。

塚本「じゃあ、まずはトイレからだ」

と、立ち上がって部屋から出て行く。

小柄な男「どうなってんだよ將軍！塚本先輩、全部持ってくつもりじゃねえか！」

將軍「心配するな。金が振り込まれたら塚本の野郎を置きざりにして脱出だ。後は特攻隊が始末してくれる」

小柄な男、ゆっくりと笑みを浮かべる。

將軍「あいつは頭が悪い。今は黙って俺に任せとけ」

小柄な男、小刻みに頷く。

塚本、戻って来る。

塚本「おい。交通費三十万と、夜に来てやったから六十万、お礼の百万も忘れるなよ」

將軍「はい」

塚本、將軍を脅すように睨みつける。

数秒が経過すると、目を逸らす。

塚本「とりあえずやってくるわ」

小柄な男、緊張した表情で刃物を渡す。

塚本、刃物を受け取って刃を舐めるように見る。

○廃工場の倉庫（夜）

塚本、刃物を片手に入れて来る。

乗客達、塚本を目で追う。

塚本、乗客達には目もくれず、隣の部屋の方に歩いて行く。

ドクター「あれは誰だ？」

地味な男「おそらく、あの血まみれの服は

奴の仕業だろう」

バス男「じゃあ!!」

地味な男、頷く。

地味な男「俺達も戦う時が来た」

ドクター「今回ばかりは君の意見に賛成だよ」

乗客達、ドクターを見る。

ドクター「みんな大丈夫かい？」

乗客達、頷く。

ドクター、扉の方を指さす。

ドクター「まず、あの扉を叩いて犯人を呼び出す。出てきたら、私達全員が一斉に携帯電話を渡して金を払うと約束をするんだ」

地味な男、鼻で笑って顔を逸らす。

地味な男「相変わらずあんたらしい考えだ」

ドクター「犯人は武器を持っている。だから上にいる犯人と直接交渉をするんだ」

吉澤「あつ、あー、その手もあるわー」

地味な男、吉澤を見る。

地味な男「ヤツに隙があれば、俺が合図を出す。あんたは体当たりをして相手を転倒させてくれ。後は俺がやる」

ドクター「そんな危険な事を私は許さない！」

○棚の裏の空間（夜）

塚本、やって来る。

座っている大野の目の前で立ち止まると、しゃがみ込んで見上げる。

塚本「準備いいか？」

と、刃物を向ける。

大野「（低）あんた、ワシを殺すつもりか？」

塚本「金詰まれたからな」

大野、息を深く吸い込む。

大野「（低）ええ度胸しとるがなー。ここまでの男を見たんは始めてや。まあ座れや」

塚本「もしかして馬鹿？」

と、大野をじつと見る。

大野「（低）馬鹿やったらあんたを男として認めとらへんがな」

塚本、大野を見続けてから座る。

塚本「少し話したら殺すからな。で、何だ？」

大野「（低）ワシもヤクザや。そのワシの極道としての価値と、アンタの男としての価値を聞きたい訳や。いくらで雇われたんや？」

塚本「八百万だ」

大野、考える様に横を向く。

大野「（低）八百万で……そらえらい少ないなー……」

と、塚本を見る。

大野「（低）それで、他はどうや？」

塚本「他？」

大野「（低）殺した後はヤクザと警察から隠れなあかんがな。その場所はどないなっとなるんや」

塚本「そんなのない」

大野、笑みを浮かべる。

大野「（低）嘘つかんと素直に言うてくれや。そんなおもしろい話がある訳ないがな。そやろー」

塚本「ない」

大野、険しい顔を見せる。

大野「（低）ちよつと待て！それ冗談やろが。嘘つかんとホンマの事言うてくれや。なー」
塚本「冗談じゃない」

大野、驚いて呆然とする様に塚本を見て黙る。

塚本「おかしいのか？」

大野「（低）ちよつと待ってくや！」

と、顔を横に向け、深く考え込むよ
うな姿を見せる。

大野「（低）一体どういう事や……まさか……
：そんな事が現実にあるんか……もしそ
れ事実やとすると……、そういう事か！」

と、膝を強く叩いて、塚本を見る。

大野「（低）あのな！今言うた事は嘘やない
な！」

塚本、少し驚いたように数度頷く。

大野「（低）はー。そら酷い。なんちゆう手口
や」

と、顔を横に振る。

大野「（低）あんだ、その連中からワシが誰か
を聞いたか」

塚本「ヤクザと聞いた」

大野「（低）そんな事は解つとるがな！もつと

大切な事を聞いたやろが!!」

塚本「他? ……大切な事? ……いや、聞いてない」

大野、地面を叩く。

大野「(低)なんちゅう扱いや! ようそこまでの事しおるわホンマ!」

塚本、不安そうな表情を浮かべる。

大野「(低)あのな! ワシは武等派組織の組長や。そのワシを殺せば、殺した相手も大変な事になってまう。せやから、ワシを殺すなら、少なくとも一億は必要や!」

塚本「一億も!!」

と、目を大きく開ける。

大野「(低)それでも安い位や。ワシの知ってる組織なら、十億は払うとるわ!」

塚本「十億も!!」

と、開いた口がふさがらなくなる。

大野「(低)そやがな! それでも怖い言うて逃げる訳や! それを八百万なんて嘘みたいな話がある訳ないがな!」

塚本「でも、あいつらヤクザじゃないし、稼
ぎが一千万位だから悪くない額だ」

大野「（低）そら嘘や」

塚本「嘘？」

大野「（低）そやがな。さつき連中はワシの所
に来おった。その時に五千万渡すから帰
つてくれ言われたがな」

塚本、呆然とする。

大野「（低）そんだけの金は持つとるがな。そ
れより先にこれだけは教えてくれや。あん
た、あの連中にどんな武器を用意しても
ろたんや？」

塚本「何も用意されてない……いやっ、この
ナイフを渡された」

と、ナイフを見せる。

大野「（低）そんなおもちゃが武器やて!!な
んちゅう扱いや！」

と、地面を叩く。

塚本「もしかして……俺……騙されてるの
か？」

大野「（低）そや」

と、深く頷く。

大野「（低）完全に騙されとる」

塚本、目と口を大きく開けている。

大野「（低）組織の幹部殺すいうのに、その事を教えんと安い額だけ出して、逃げ場もない、武器はオモチャみたいなナイフ一本で、まるで使い捨てや。ほんま酷い事しておる。せやから、あんたが怒る前に、ワシがその事で怒っとぐらいや」

塚本「なんであんたが怒ってくれるんだ!!」

大野「（低）ワシが認めた男やからや。そこまで認めた男を、ここまでコケにされてもうたら、そら誰かて怒るがな」

塚本、の手が握り拳を作る。

大野「（低）連中は最初からあんたを利用するつもりやった訳や。さすがのワシかてブチ切れてまうわ」

塚本、体が震えだす。

塚本「あいつら、先輩の俺を騙しやがって…

：

大野「（低）その気持ち痛いほど伝わるわ。酷い話や、いや、酷過ぎる話や」

塚本「あの馬鹿鼻クソ！」

と、地面を強く殴りつける。

地面を睨みつけて激しく呼吸をする。

少しすると呼吸が落ち着く。

大野「（低）どや兄ちゃん、これも何かの縁や。そんな連中とは縁切って、ワシの組に入らんか？」

塚本、驚くように大野を見上げる。

大野「（低）兄ちゃんは二十年に一人現れるか現れへんかの逸材や」

塚本「俺が？」

大野「（低）そやがな。アンタは間違いなく、この道で成功する素材を持つとる。どや、十億や二十億稼いで、一家もったらへんか？」

塚本「でも危険な世界だろ？」

大野「（低）それが意外な事にやな、ヤクザ

になった方が安全な訳や」

塚本「ヤクザが安全なのか!!」

大野「(低)そやがな。今の兄ちゃんはこの組織にも入っとらへん。誰かてアンタを簡単に殺せる訳や。せやけど、ワシの組織に入っとったら、誰もあんたに手出されへん」

塚本、笑顔になる。

塚本「そりや安全だー。ふっははっ」

大野「(低)なー」

塚本「ああ。安全だー」

大野「(低)違うか？」

塚本「違わねーなー。ははっ」

大野「(低)そやろー」

塚本「ふははっ、はっ！ふはっ、だなー。ふはははっ！」

と、締りのない笑顔を見せる。

大野「(低)後は兄ちゃんが男か男違うか答えるだけや。一言返事したれや」

塚本「ヤクザっていいなー。ふはっ！」

大野「(低)よっしや決まりや！あんたの名

前は！」

塚本「塚本純一！」

大野「（低）そうか！純！ワシについて来いや！」

塚本「はい！お願いします！」

と、頭を下げる。

○廃工場の倉庫（夜）

乗客達、塚本の気配を感じ、隣の部屋の方を見る。

塚本、険しい表情で隣の部屋から出て来ると、扉の前に来る。

扉を叩く。

扉が開くと、外にいる誰かを押し倒して外に出て行く。

扉が閉まる。

バス女「どうしたんだろう……」

バス男「もしかして、仲間割れでもしてるんじゃない？」

ドクター、驚いた様に立ち上がる、急

いで隣の部屋に走る。

吉澤「あっ！」

と、思い出した様に立ち上がり、小走
をして隣の部屋に走る。

○廃工場の倉庫の隣の部屋（夜）

吉澤、走ってやって来る。

ドクター、怯えた表情で、棚の裏から
逃げ出すように出て来る。

吉澤「あつ、あー……まさかー……」

ドクター、深刻な表情を浮かべて頷
く。

ドクター「ああ、そのままさかだ。危険人物が

この裏にもいる！」

吉澤「あつ、あー」

と、安心する表情を浮かべる。

ドクター「ん？」

吉澤、両手を箱を待つ形にする。

吉澤「実はー、棚の裏の人は、ヤクザじゃー、
ないんです」

ドクター「ヤクザじゃないだつて？」

吉澤「両手を右へ。」

吉澤「僕の一」

両手を右上へ。

吉澤「同級生。それで一、今は一」

右上から中央へ。

吉澤「自分と一、同じで一、家に一」

中央から左上へ。

吉澤「引きこもってはる人！」

ドクター「私を安心させようとして言ってくるんだらう。ありがとう。だけど、とてもそんな風には見えないよ」

と、顔を横に振る。

吉澤「本当です」

ドクター「いいんだ。そんな事をしなくても」

吉澤「違います違います。自分の一、家の近くに一、ああ感じの一、髪型に一、してしまおう一、散髪屋さんが一、あるんです！」

ドクター「それがあの髪型？」

吉澤「そーなんですよー。犯人がー、その髪型をー、見てー、ヤクザとー、勘違いー、したからー、ヤクザにー、なりすー、作戦がー、始まったんです！」

ドクター、驚いた表情を浮かべる。

ドクター「それが君達の言っていた作戦だったのか」

吉澤「はい」

ドクター「じゃあ武器と言っていたね。それは何だい？」

吉澤「あの髪型とー、サングラス！」

ドクター「そう言う事だったのか」

吉澤「それで、今はー、順調にー、進んでるー、真っ最中！」

と、拍手をする。

ドクター「犯人がこの事に気づけば大変な事になる」

吉澤「あつ、あー……」

ドクター「事が大きくなる前に、私が犯人達の元に行つて、全てを謝罪してこよう」

と、歩き出す。

吉澤、ドクターの服を掴んで止める。

吉澤「ダメですダメです。それをしたらー、

作戦がー、台無しにー、なっちゃいます」

ドクター「なら、私一人で棚の裏に行かせて
くれるかい。その彼と二人で話したい事がある」

吉澤「それならー、大丈夫です」

ドクター、棚の裏に向かう。

○廃工場の倉庫（夜）

扉が開く。

バス男、バス女、地味な男、扉の方を見る。

塚本、バス男が閉じ込められている檻
に乗せた台車を押して入って来る。

背後の扉が開いている。

地味な男、それを見ると、吉澤を探
す。

吉澤、隣の部屋から出て来る。

地味な男、吉澤さんの元にやって来る。

地味な男「作戦を実行する時が来た」

吉澤「え!!」

と、扉の方を見る。

吉澤「あつ！」

地味な男「今だ！」

吉澤、全力で塚本に向かって走る。

地味な男、その後を追う。

塚本、檻の前に行き、扉に触れる。

吉澤、その時、塚本に体当たりをする。

塚本、押し飛ばされて、壁に頭をぶ

つけて気絶する。

地味な顔、塚本の元に行き殴る構えをする。

地味な男「気絶している。よし、外に出るぞ！」

と、吉澤と扉の方を向く。

小柄な男、扉の外に現れ、急いで扉

を閉める。

鍵の閉まる音がする。

吉澤「あつ、あー」

地味な男、困った様に口から息を吐く。

○廃工場の事務室（夜）

誰もいない。

小柄な男、走って来る。

小柄な男「来てくれ將軍！大変だ！將軍！」

將軍、走ってやって来る。

將軍「どうした!!」

小柄な男「人質が反抗しだして、塚本先輩が捕まった」

將軍「なんだと!!なら今すぐ武器持って救出して来い！」

小柄な男「問題があるんだ」

將軍「うるさい！どうでもいい事は後にしろ！急げ！」

と、小柄な男を両手で押し出す。

小柄な男「だけど」

將軍「早く武器を取って来い！」

と、その場から走って出て行く。

小柄な男、嫌そうに別の方向へ走って行く。

○廃工場の倉庫（夜）

地味な男、バス男を台車の上に乗っている檻の中から出す。

バス女、バス男に近づく。

バス女「大丈夫？」

バス男「僕は大丈夫だよ」

地味な男「まだ作業は終わってない。そいつを檻の中に入れるぞ」

と、その先に倒れて気絶している塚を顎で示す。

地味な男、吉澤、バス男、力を合わせて、塚本を檻の中に入れ、扉を閉める。

一息つく。

突然、扉が勢い良く開くと、小柄な男を先頭に、太った男、大柄な男、入って来る。

小柄な男、太った男、乗客達に刃物を向ける。

小柄な男「てめえら動くんじゃねえ！」

大柄な男、その背後で、塚本の入った檻が乗っている台車を引っぱって外に出て行く。

小柄な男、太った男、それを確認すると、乗客達に背を向けず、ナイフを向けたまま扉の外へ出て行く。

乗客達、顔を合せ合う。

地味な男「まずい事になったぞ」

と、舌打ちをする。

○廃工場の事務室（夜）

檻の中で気絶している塚本。

それを囲んで見ている将軍、小柄な

男、太った男、大柄な男。

將軍、檻に近寄り、檻の鍵を開けようとする。

小柄な男、急いで將軍に駆け寄る。

小柄な男「出したら駄目だ！」

將軍、呆然と小柄な男を見る。

小柄な男「さつき扉を開けたら、塚本先輩が突然襲いかかってきたんだ。それで閉じ込めてた人質を部屋の中に戻したら、今度は人質が塚本先輩に襲いかかってこうなったんだ」

將軍「あ？……。何がどうなってんだ……」

と、目を泳がせる。

○廃工場の倉庫（夜）

ドクター、棚の裏から出て来る。

乗客達の中にバス男がいる。

ドクター「なぜ君がいるんだ!？」

バス男、ドクターを見て眉を潜める。

バス男「怪我は大丈夫なんですか……」

ドクター「私の事なんてどうでもいい。外で何が起こっているんだ？」

バス男、何も答えない。

ドクター「君！聞こえているかい！」

バス男「今はちよつと、少し休ませてください」と、隣の部屋の方に歩いて行く。

ドクター「待つんだ！おい君！おい！」

地味な男、ドクターの肩に手を乗せる。

地味な男「後でいい事だ」

ドクター「あー！」

と、髪をかきむしってから、吉澤と地味な顔を睨む。

ドクター「君達は事態をどんどん悪化させているよ！こんな事をしていたら、大変な事になる」

吉澤「でもー」

ドクター「全員皆殺しにされるぞ！」

と、吉澤と地味な男を交互に睨みつける。

○棚の裏の空間（夜）

大野、バス男、向かい合って座っている。

バス男「あの人は犯人側の人間で、僕たちを誘導して作戦を動かしています」

大野「あの人が？」

バス男「閉じ込められていた部屋に犯人達の話し声が聞こえてきたんです。そこでその話をしていました。間違いありません。その証拠に、さっきは血まみれになって瀕死の重傷だったのに、今見たらその事を忘れてるんです。明らかにおかしいですよ」

大野、黙り込む。

バス男「どうしたんですか？」

大野「その人に、もうヤクザじゃないって知られてしまいました」

バス男「大変だ。あの人と犯人が接触したら、この作戦は失敗してしまう」

と、困った様に黙り込む。

大野「でも、あと少しの間、あの人と犯人を合せない様にすれば、外に出られます」

バス男「どういう事ですか？」

大野「一番強そうな犯人を組員にしたんです」

バス男「もしかして、僕をこの場所に戻し

た人じゃ？」

大野「その人です」

バス男「さつき吉澤さんがその人を倒してし

まいました」

大野「えー!! よつ、吉澤さんが倒した？」

と、驚いた様に呆然とする。

○廃工場の倉庫の隣の部屋（夜）

バス男、棚の裏から出てくる。

ドクター、そこに腕を組んで立っている。

ドクター「また何か企んでいるのかい？」

バス男「棚の裏の人が貴方に話しがあるって」

ドクター「僕もだよ。ヤクザの真似事なんて

やめて、平和的に取引を成功させるべき

だとね」

と、棚の裏に向かう。

○廃工場の事務室（夜）

將軍、小柄な男、太った男、大柄な男、呆然と佇んでいる。

小柄な男「あのヤクザ、マジどうなったんだ？」

將軍「これが答えだ」

檻の中で気絶している塚本。

將軍「取引は失敗だ」

と、ソファーに座って地面を見る。

足元には武藤の名刺が落ちている。

小柄な男「失敗って、俺達殺されるのによ？」

將軍「それを防ぐ為に、これから武藤に電話する。儲けは半分以下。これが答えだ。

電話して来い」

と、名刺を拾って小柄な男に渡す。

小柄な男、名刺を受け取ると、走ってその場を後にする。

將軍、大きなため息を吐いて、ソファーにもたれかかる。

○廃工場 小さな部屋（夜）

小柄な男、受話器を耳に当てて、名詞を見ながら固定電話の番号を押している。

○廃工場の事務室（夜）

将軍、太った男、大柄な男、地面を見て座っている。

小柄な男、走って来る。

将軍「武藤は何て？」

小柄な男、名刺を見せる。

小柄な男「ここに書いてる組事務所は存在してねえ！」

将軍「間違ったんじゃないのか？」

小柄な男「そう思って三回かけ直したら、三回とも同じ精神病院に繋がった！」

将軍「精神病院……」

と、眉を潜める。

小柄な男「思い出したんだけど、武藤って昔、嘘ばかりついてたよな」

將軍「そうだ。って事は、武藤のヤツ、ヤクザに成りすまして、俺達の金を取ろうとしてたのか……」

と、黙り込むと、勢い良く立ち上がる。

將軍「あの嘘つき野郎！」

と、机を蹴り飛ばす。

怒りを抑える様に激しく呼吸する。

小柄な男「これから俺達、どうすんだよ？」

將軍「もう終わりだ」

と、地面に倒れ込む。

太った男「じゃあ逃げようぜ！」

將軍、ため息を吐いて目を閉じる。

太った男「このままだと特攻隊が来ちまう

ぜ！」

將軍「どうでもいい」

太った男「宇治にあるバス停には、俺達みたいなヤツが埋まってるんだぜ！」

將軍、目を開ける。

少しすると、勢い良く起き上がり、太った男に近づく。

將軍「今なんて言った!!」

太った男「宇治のバス停には俺達みたいなのが武器ごと埋められてんだ」

將軍、笑い出す。

太った男「ついに將軍の気が狂った!」

將軍「違げーよ! お前は最高の情報を引き出してる。その情報があれば、ヤクザから金をぶんどくれるぞ!」

小柄な男「それマジ……かよ」

將軍「そうだ。こんな所にお宝があるとは思
いもしなかった」

と、笑いだす。

○廃工場の倉庫(夜)

大野とドクター以外の人質達がいる。

將軍、扉を開けて入って来る。

小柄な男、刃物を持って後ろから入
って来る。

將軍「九州のヤクザに話がある。名乗り出
ろ!」

バス女、驚いて乗客達を見る。

将軍、壁にもたれて無表情に腕を組んでいる地味な男を見る。

将軍「お前が九州のヤクザだな」

バス男、一步前に入る。

バス男「その人じゃない。呼んで来るから、

そこで待っていてくれ」

と、隣の部屋の方へ走る。

○棚の裏の空間（夜）

バス男、やって来る。

後姿のドクター、その先にいる大野。

バス男「吉澤さんが呼んでます」

ドクター、立ち上がって振り返る。

ドクター「解った。今すぐ行こう」

バス男「いや違います。大野さんの方です」

大野、立ち上がって外に出る。

ドクター、続いて外に出ようとする。

バス男、道を塞ぐ。

バス男「吉澤さんが説得してくれませす」

ドクター「その彼も目覚めたのか。なら、私達も早く行こう」

バス男「駄目です。今貴方が行けば逆効果です。吉澤さんが言うからこそ、大野さんはその話を聞くんです。」

ドクター、不満そうな顔を浮かべる。

嫌そうに床に座る。

バス男、その正面に座る。

○廃工場の倉庫（夜）

バス女、地味な男、將軍達の方を見ている。

將軍、険しい顔で待っている。

その背後で刃物を持っている小柄な男。

大野の声「（低）コラクソガキ！おどれが舐めた事して腐ったボケタレか！」

將軍、驚いて一步後ろへ下がる。

大野、隣の部屋から出て来ると、將軍に近づいて行く。

大野「（低）ワレなに晒とんじやいボケ！鉛の玉ぶち込むだけでは済まんぞコリヤ！」

将軍、慌ててズボンの間に挟んでいる

トランシーバーを取り出す。

将軍「きつ、聞こえるか！どうぞ！」

太った男の声「聞こえるぜ。どうぞ」

将軍、トランシーバーを大野に向ける。

将軍「それ以上近づくと警察を呼ぶぞ！」

大野、立ち止まって、眉毛をサングラ

スの中に隠す。

大野「（低）なんやと？警察を呼ぶやて？」

将軍、不敵な笑みを浮かべる。

将軍「あんたは宇治で何をした？」

大野、笑いそうになって口元が少し

動く。

将軍「俺がこのトランシーバーで連絡をすれ

ば、その事を仲間が警察に通報する。そ

うなりやどうなる」

大野「（低）なっ、なんやと!!」

将軍、笑い出す。

大野「（低）なに笑つとんじやコラ！」

將軍、トランシーバーを使う。

將軍「通報して欲しいみたいだ。どうぞ」

太った男の声「もう通報していいのか？ どうぞ」

將軍「とりあえず交渉する。五分後に答を出す。どうぞ」

太った男「解つたぜ。どうぞ」

將軍、トランシーバーを下げる。

將軍「これで解つただろ。有利な立場にいるのは俺達の方だ」

大野、笑いそうになり、口元がさらに動く。それを齒を噛みしめて防ぐ。

大野「（低）やれるもんならやってみんかい！」

將軍「俺達はあるたと一緒に刑務所に行く覚悟で交渉してるんだ！ あんまり偉そうな口聞いていると、本当にやるぞ！」

大野「（低）やってみんかいコラアホ！ どこでも行つたらないかいボケ！ さっさとやらんかいクズ！ 早よやってみんかいこのクソガキ！」

將軍「強がるなよ。同じ犯罪を起こしても、あんなの方が罪は重くなるんだ。ヤクザだからな。そこでだ。あんたが俺達の用件を呑むなら、警察には通報しないでやってもいい」

大野「（低）刑務所が怖くてヤクザが勤まるかヘタレ！ さっさとやらんかいこのボケ！」

將軍、トランシーバーを見せ付ける。

將軍「好きな方を選び」

大野、何も言わず、將軍を睨み続ける。

將軍「聞こえないのか！ 用件を呑むか通報されるか選べって言うてるだろ！」

大野「（低）じゃかましいわボケ！ この場でしばきたおすぞコリヤ！」

將軍「よつぽど警察を呼ばれるのが都合悪いみたいだな」

と、笑みを浮かべてから、真剣な表情を見せる。

將軍「十億だ！」

大野「（低）十億やと!!」

將軍「それで警察には黙っていてやる。悪い話じゃないだろ」

と、覚悟を決めた表情を見せる。

大野、それを見て、口元が笑いそうになる。必死に硬直させて耐える。

將軍「さつきと態度が違うぜ。これが最後だ。答えろ！」

と、トランシーバーの発進ボタンを押して構える。

バス女、將軍の前に出る。

バス女「貴方達は卑怯よ！」

部屋にいる全員、バス女を見る。

バス女「自分達が起こした事件で迷惑をかけてるのに、関係ない人の犯罪暦を使って脅すなんて最低よ！」

將軍「関係ないヤツは黙ってる！」

バス女「貴方達だって刑務所に行ったら簡単には出て来れないわ！」

小柄な男「てめえは黙ってるよ！マジ刺しち

やうぞこの野朗！」

バス女「刺したら罪が重たくなるわよ。そう
なれば警察を呼ぶなくなるんじゃないの」

小柄な男、ナイフを振り上げる。

小柄な男「てめえ脅してんのかよ！」

バス女「それはナイフを振り上げてる貴方の
方でしょ！」

小柄な男「てめっ……この野朗っ……」

將軍「雑魚を相手にするな！」

小柄な男、ナイフを下ろして、大野
を睨みつける。

バス女「貴方達は警察なんて呼べないわ！」

小柄な男「てめえは黙ってる！マジ叩いちや

うぞこの野朗！」

將軍「相手にするなって言ってるだろ！」

バス女「今さら気にしたつてもう手遅れよ！」

小柄な男「何が解るんだよてめえによ！」

將軍「辞めろ！相手にするな！」

バス女「あなた達は何の罪もない家族を殺
してるのよ！そんな事した人達が、簡単

に刑務所から出られる訳ない。だから警察を呼べないわ！」

大野、地面を蹴るように踏みつける。

小柄な男「俺達はマジ警察呼べんだよ！」

大野、握りこぶしを作って小さく振る。

バス女「あの血まみれの服の事をどう説明するのよ人殺し！」

大野「クソっ！」

と、ヘディングするような動きをする。

将軍「関係ないヤツは黙ってる！」

バス女「都合が悪いみたいね！でも証拠は隠せないわ！」

小柄な男、不敵な笑みを浮かべる。

バス女「何がおかしいの！」

小柄な男「あの服は赤い絵の具で作った偽物なんだよ！てめえら脅す為の道具だよ
バーカ！俺達は前科のない善良な市民だ！マジ叩いちゃうぞこの野郎！」

バス女、呆然とする。

静まり返る。

吉澤「あつ、あー。なんやー。あー」

地味な男、腕を組んだまま鼻で笑う。

地味な男「やはり、この連中に人を殺す度胸はないようだ」

小柄な男、動揺して乗客達を見る。

将軍、一歩前に出る。

将軍「こいつの言った通りだ。俺達は逮捕されても平気だ。これでどちらが有利な立場か解つただろ。どうする、刑務所に入るか、十億で終わらせるか、答えを出せ！」

大野、何も言わず、顔を硬直させて笑ってしまう事に耐え続ける。

将軍「十億に決まりだ。そうだろ？」

大野「(低)あんたの言う通り、ワシは数え切れんほどの悪い事をしてきた。こんな重要な時期に逮捕されてまえば、組織が崩壊してまうかもしれへん」

将軍、トランシーバーを使う。

将軍「聞こえるか。今からヤクザが言う事

を良く聞いておけ」

と、発進ボタンを押したまま、大野に
トランシーバーを向ける。

大野「（低）通報されるほど、困る事はあら
へん。せやけどな、一つ思うとった事があ
るんや。ワシもそろそろ潮時やないかと」

將軍、顔が陰しくなる。

大野「（低）これも何かの縁や。お互い刑務
所行つて罪を改めるか、これから裏の世
界で全面戦争始めるか、あんたに賭けさ
せてくれや。なー」

將軍、呆然としたまま動かなくなる。

吉澤「あのー、早く決めた方がー、いいと思
いますよー。そうしないとー、来てしまいま
すから。特攻隊が」

時間が止まったように静まりかえる。

太った男、飛び出すように扉を開け
て入って来る。

太った男「將軍！特攻隊はもう大丈夫
だ！今警察を呼んだぜ！」

トランシーバーが地面に落ちる。

将軍、倒れるように地面に座り込む。

地味な男「答えが出たようだな」

と、歩き出し、犯人達の横を通り過ぎ、開いた扉から外に出て行く。

大野、バス女、続いて外に出て行く。

バス男、棚の裏から出て来る。

将軍、太った男、落ち込んだよう下を向いている。

吉澤、扉の前に座っている。

バス男「どうなってるんですか？」

吉澤、バス男に気づいて立ちあがる。

両手が箱を持つ形になって左へ動く。

吉澤「ついにー」

左から右へ。

吉澤「解決！」

と、拍手をする。

ドクター、棚の裏から出てくる。

開いた扉から出て行くバス男の姿。

諦めた表情の将軍と小柄な男と太

った男。

ドクター「騙されるな！あの男はヤクザなんかじゃない！角刈りになった引きこもりがサングラスをかけているだけだ！」

將軍、太った男、小柄な男、慌てて扉の方を見る。

扉の外にいるバス男、扉が閉まる寸前の隙間から、犯人達を覗き込んでゐる。

バス男「そういう事だったんですね」

ドクター「いや違う！私は違う！」

バス男「犯人は全部で五人。あなたが本当の主犯格だ」

ドクター「私は関係ない！五人目はバスの運転手だ！あつ……」

と、急いで口に手を当てる。

バス男「六人だったんですか。なるほど。ちゃんと警察に伝えておきます。さようなら」

と、扉を閉める。

鍵の閉まる音が響く。

部屋の電気が消されて暗闇に包まれる。

終わり